

障がいのある子どもたちの絵画コンクール
「第16回キラキラとアートコンクール 優秀賞作品展」開催
～10月27日（金）より横浜会場からスタート～
今年度のコンクールが政府による「beyond2020 プログラム」の認証を取得

三菱地所株式会社は、10月27日（金）から来年2月にかけて、全国7会場にて、「第16回キラキラとアートコンクール優秀賞作品展」を開催します。

「キラキラとアートコンクール」（後援：文部科学省・全国特別支援学校長会）は、障がいのある子どもたちの可能性を応援したいとの思いから、国内初の障がい者アートライブラリー アートビリティ^{※1}の協力を得て、2002年にスタート。歴代応募者の中からアートビリティの登録作家として現在22名が活躍するなど、子どもたちの才能を支援してまいりました。

※1 アートビリティ・・・1986年に社会福祉法人東京コロニーが設立した障がい者アートライブラリー。現在約200名の作家による約5,000点の作品がストックされ、印刷物等の媒体に貸し出されています。

本作品展は、16回目を迎える同コンクールの全応募作品1,512作品（40都道府県）の中から、審査会（1次審査・三菱地所グループ社員審査^{※2}・本審査）を経て選ばれた優秀賞50作品を全国7会場で展示するものです。来年2月16日には、東京・丸ビルホールにて、表彰式を予定しております。

※2 一部、丸の内テナント企業社員を含む

各会場では、自由なテーマで子どもたちが思いのままに表現し描いた個性豊かな作品に対し、来場者からメッセージを受け付け、今後の励みにつながるよう、受賞者本人にお渡しします。

また、全応募作品は、コンクールホームページで公開するほか、応募作品はこれまで、様々な企業の冊子の表紙やカレンダーなどに使用されており、子どもたちの作品は、審査会、作品展、作品使用等を通じて、感動を与えています。

本コンクールは、政府が、日本の強みである地域性豊かで多様性に富んだ文化を活かし、成熟社会にふさわしい次世代に誇れるレガシーを創り出す文化プログラムとして認証する「beyond2020 プログラム」に選ばれました。



三菱地所では、本コンクールが子どもたちの優れた才能を評価・発掘・展示する機会となり、子どもたちが絵を描く楽しみや喜びを増し、芸術活動の裾野が広がることを願い、応援してまいります。

【第16回キラキラとアートコンクール優秀賞受賞作品より】



左から「水族館」さとう ひみかさん(11歳)、「ソーレ！ヤー！」てらさわ たけるさん(9歳)、「車椅子バスケット」やざき けいごさん(17歳)、「かっこいいライオン」ゆべ らいむさん(7歳)

1. 開催概要（予定）

- ①名 称：第16回キラキラっとアートコンクール優秀賞作品展
- ②日 程：【横浜 ランドマークプラザ 3階イベントスペース】
2017年10月27日（金）～10月29日（日） 11:00～18:00
横浜市西区みなとみらい2-2-1
- 【名古屋 大名古屋ビルヂング 3階レストスペース】
2017年11月3日（金・祝）～11月5日（日） 11:00～21:00
名古屋市中村区名駅3-28-12
- 【大阪 OAPタワー 1階エントランス】
2017年11月24日（金）～11月27日（月） 10:00～18:00
大阪市北区天満橋1-8-30
- 【札幌 マルヤマクラス 2階イベントスペース】
2017年12月8日（金）～12月10日（日） 10:00～20:00
札幌市中央区南1条西27丁目1-1
- 【福岡 イムズ 地下2階イムズプラザ】
2018年1月6日（土）～1月14日（日） 10:00～20:00
※1月6日（土）～1月8日（月・祝） 10:00～18:00 はメッセージを受付いたします。
福岡市中央区天神1-7-11
- 【仙台 泉パークタウン タピオ 南館1階ノースコート】
2018年1月26日（金）～1月28日（日） 10:00～20:00
仙台市泉区寺岡6-5-1
- 【東京 丸ビル 1階マルキューブ】
2018年2月16日（金）～2月19日（月） 11:00～19:00
千代田区丸の内2-4-1

各会場では、作者へのメッセージをお寄せいただき、メッセージを記入頂いた来場者には、本コンクール第15回優秀賞作品を使用して、社会福祉法人東京コロニー在宅就労グループ「es-team（エス・チーム）」※がデザインした「シール」をプレゼントします。

※es-team・・・「働くカタチは、ひとつじゃない」を合言葉に重い障がいのあるデザイナーやプログラマーなどが集う在宅就労（SOHO）グループ。

③入 場 料：無料

④応募作品：・応募資格：何らかの障がいのある応募年齢18歳までの幼児・児童・生徒

・応募期間：2017年7月3日（月）～9月12日（火）

・作品規定：課題は自由。水彩、油絵、版画、パステル、鉛筆、貼り絵、切り絵など平面表現のもの。

サイズは最大で60cm×50cm以内（最少はA4サイズ程度）

2. 審査員講評

■O JUN氏（画家・東京藝術大学教授）

広いビルのフロアに並べられた1500点以上の作品の迫力はそれを審査する私たちの目を圧倒する。審査が始まれば全ての作品がさらに私たちを右往左往させるのだ。これは毎年繰り返される光景だ。今年もこの壮観と私たちから洩れる悲鳴（嬉しい？）でくたくたになった。そして、絵の力の凄さをあらためて知った。同時に絵の力とは何だろう？と自問した。私は美術大学で教員をしているが毎年受験では“キラキラっとアートコンクール”と同じくらいの数の絵を審査する。これもとても疲れる仕事なのだが印象は大分違う。人が絵を描く動機は様々でそれが何かは絵に映り込んでいる。受験の絵の大部分は合格するためだ。“キラキラっとアートコンクール”の絵は描くことが面白い、というのがモチベーションになっている。塗り方や線の引き方でわかる。絵のイメージよりも、それをどう描くかに渾身を傾けている。画材と細心にやり取りをしている。美大生の絵とキラキラっとアートコンクール応募者の描いた絵を単純に比較することは出来ない。けれども、「お前は、昨日はどう絵を描いたのか？明日はどう描くつもりなのか？」と絵から問われた。これも毎年の繰り返しだ。皆さんと絵に心から祝福を送ります。

■青柳 路子氏（茨城大学准教授、東京藝術大学非常勤講師、教育学研究者）

どうして子どもの絵が好きなのか。なぜ子どもの作品に魅力を感じるのか。子どもが描いた作品には子ども独自の世界や物語があり、筆や鉛筆・ペンの運びから子どもたちの描く身体の様子、描くことの喜びや格闘が感じられるから。たとえ、たどたどしくても、どんなに小さな作品であっても、自分自身も夢中になって描いた小さい頃の、あの豊かな表現するときを子どもたちがきっと感じて描いていると想像することができるから。今回のコンクールの応募作品一点一点を見て改めて考えた、私の答えです。

「キラキラっとアートコンクール」には今年もたくさんの応募作品が寄せられました。応募された作品はそれぞれに違った魅力があり、人間一人ひとりが異なること、一人ひとりが容易には想像できない豊かな内面世界をもっていて、それぞれのものの見方やとらえ方、表現の仕方があることを子どもたちが作品をとおして、私たちに教えてくれているように感じました。

惜しくも優秀賞に選ばれなかった作品にも素晴らしいものがありました。今回は優秀賞を逃しても、今年でコンクールを卒業となっても、子どもたちには描くことを続けていってほしいです。

色やかたちは、言葉では表現しきれない世界や思いを表現することを可能にします。絵画という手段だからこそ可能になる子どもたちの表現をより多くの方に見ていただき、子どもたちを支える輪が、保護者の方々や学校・絵画教室の先生方から広く社会に広がっていくことを願っています。

■西田 克也氏（西田克也デザインオフィス グラフィックデザイナー）

第16回キラキラっとアートコンクールも1,500点以上の作品の中から優秀賞50点（というか実は3年連続1点を落とすのが辛くて？51点なんですけど…）を選び終えて、一息ついたところで作品を思い浮かべながらこの講評を書いているわけです。ところで、作品を思い浮かべると言っても、一次と本審査の（ほんの！）2回目にしただけの作品群の中で、記憶の壁から立ち上がってくる作品は、やっぱりテーマがユニークで、構図は大胆、しかも色彩の選び方が一筋縄ではいかない様な作品なんですけど、そういう記憶に残る作品が何となく減ってきているような気がするのは、僕の感性が摩耗したせいなのか、それとも、作品の技術的なレベルが上がって、上手いなあとと思わせる作品が増えた代わりに、描く技術とは関係なく有無を言わせぬような存在感のある作品が実際減っているからなんですか？と、もちろん前者であることを願っています。

■高橋 宏和氏（社会福祉法人東京コロニー アートビリティ代表）

今年も選ぶのが難しい多くの魅力ある作品に溢れていました。

テーマも表現方法も自由のコンクールというと、何を描こうか、表現方法はどうかと非常に悩んだ応募者もいると思いますが、自由な発想から生まれた作品は、それぞれに作者の思いが加わり、とても個性的な作品に仕上がっています。個性的な作品はそれだけで多くの話題を提供しますが、審査会でも審査員同士で多くの意見交換をしながら白熱した審査をさせていただきました。審査会は終了しましたが、今後、応募作品の全てはホームページで公開され、審査会で感じた驚きを更に多くの人に見てもらえる機会があります。キラキラっとアートコンクールをきっかけに絵を描く楽しさに目覚め、少しでも多くの応募者が絵を描き続けてくれる事を望みます。

■吉田 淳一（三菱地所株式会社 執行役社長）

今年で16回目を数える本コンクールに、今回も全国から1,512点のご応募をいただきました。40の都道府県から団体応募173団体（1,474作品）、個人応募38作品、最年少応募者は3歳です。昨年度比で、70団体が新規応募であるなど、本コンクールが少しずつ広がっていることをとても嬉しく思います。

応募してくださったお子さん方の気持ちのこもった絵を拝見すると、それぞれが放つ個性に魅了されるばかりでなく、私たちの目の前に絵を届けてくださった保護者の方々や学校の先生、関係者の方々のご協力、ご苦勞に感謝の気持ちでいっぱいになります。

今回も最後の1作品が絞り切れず、3年連続で51作品を優秀賞として選定させていただきました。本作品展は、全国7会場を巡回いたしますが、昨年度より当該優秀作品展が終了した後も、一部の絵については三菱地所グループ各社の受付に展示して、来訪される方々にも楽しんでいただけるようにしております。今後も応募者の皆様、審査員の方々をはじめ、作品をご覧いただく全ての皆様の変わらぬご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

■高橋 明也 (三菱一号館美術館 館長)

毎年恒例の催しとはいえ、審査会場に足を運んで、実際に沢山の作品に触れると、全身が刺激される。何故かと言えば、若い彼ら、彼女らが絵画に対峙する時の真摯さ、制作の際の喜びや緊張感が、素直に、そして生きいきと伝わってくるからだろう。

描くことの根源は、自己とそれを取り巻く世界や宇宙との関係性の中にある。この世に産み落とされた人間は、いつか死に至るまで、誰もが孤独な旅をしていく訳だが、その伴侶として絵を描く習慣と技術を身につけた者は幸せだ。広大な未知の世界に軽々とアクセスできる、とても深くて有効なツールを手に入れたのだ。今やそれが、さまざまなデジタル機器を介して行われる場合も多いが、紙という何千年にもわたって用いられてきた媒体と、絵の具や鉛筆、パステルなど、直接手に伝わる材料を使って描くことの重要性は筆舌に尽くしがたい。

肌に触れることのできる柔らかな紙や絵の具。全身の感覚器を通して慣れ親しんだ物質に触れながらイメージの創作に打ち込める、そんな貴重な機会を持てることは、ますますハイテク化される現代生活においては稀有なことなのかもしれない。

そして、そうした制作者たちの喜びが脈々と伝わってくるのが、この催しなのである。

※審査後、受賞者辞退により受賞作品は 50 作品となりました。

3. その他

本コンクールは、公益社団法人企業メセナ協議会による芸術・文化振興による社会創造=メセナ認定制度「This is MECENAT2017」を取得。



以上

《審査会の様子》

■1次審査（2017年9月29日）



■三菱地所グループ社員審査（2017年10月3日～5日／2会場）

※一部、丸の内テナント企業社員を含む



■本審査（2017年10月6日／三菱地所本社にて）



優秀賞・全応募作品をホームページ（<http://www.kira-art.jp>）にて公開しています。